

夜のどろりが降りた住宅街で、私はある人の煙草をすって待っていた。取材を申し込む手紙を事前に何通か出していたが、返事はもらえていなかった。

2004年9月9日、愛知県豊明市の民家で加藤利代さん（当時38）と長男佑基さん（同15）、長女里奈さん（同13）、次男正浩さん（同9）が殺害され放火された事件（豊明事件）で、唯一難を逃れたのが、利代さんの夫であり3人の子の父親である男性だった。

警察、マスコミ不信感

男性は事件の翌年、勤め先から1千万円以上を詐取した詐欺罪で起訴され、執行猶予付きの有罪判決を受けた。判決後、記者会見を開いて警察の「別件逮捕」を批判したのを最後に、公の場に出ることはなくなった。

それから約20年がたち、男性は66歳になった。仕事から作業着姿のまま帰省した男性に声を掛けると、警戒した様子ながら、手紙は読んだと言っ、いくつか会話を感してくれた。少し細身になったように感じたが、当時と雰囲気はあまり変わってなかった。

豊明事件が未解決で風化の危機にあることについて、男性は「警察とマスコミが風化させたよね」と言った。「思うことはいろいろあるが、マスコミに話しても切り取られて、知らないように扱っての繰り返し。誰か来てほしい」と話した。

当時、詐欺事件の裁判の過程で、交際していた女性の存在が

夫が語ったトラウマ

加藤 美喜 (編集委員)



豊明母子4人殺人放火事件の情報提供は、愛知県警愛知署特別捜査本部（電話0110（代表）三へ）

明らかに、家族思いで子煩悩な父親、という職場や近所での評判が失われてしまった。警察とマスコミが風化させたとは、警察は捜査の方向性を誤って事件を迷宮入りにし、そんな警察にマスコミは加担したという批判なのだろう。

4人の命が奪われた事件について、利代さんの姉や母が献花式や情報提供を求める活動をしてきたのに対し、男性は一切関与してなかった。男性は、利代さんの実家に対して「今も活動をしている姿を見ると申し訳ないとは思って話し、自身の子などにも「かなり迷惑をかけてきた」と語った。しかし、一線を引く理由については「自分が何をしても結局はそうい目（容疑者視）で見られる。事件を解決するのは警察の仕事。自分は警察には協力したくない。一度と関わりたい。そとしておいてほしい」と繰り返した。

警察とマスコミ不信の根深さは想像以上だった。私は時間を置いてまた手紙を書き、再び会いに行った。

二度目に会った男性は「別件逮捕」のトラウマ的体験をほつほつと語った。警察署か

拘置所が分留先の部屋から無理やり引張り出されて、狭い部屋に連れて行かれ、殺人放火についてしつこく聞かれた「何を言われようとおの恐ろしさは経験していない人には分からない」と強調した。

そして、男性は両脚のものを刃をさすりながら、「僕の脚は傷だらけだ」と言った。言葉は一瞬、詰まった。私に「警察にやられたんじゃない。自分でやっただ。ペンを何度も突き刺した。そうしないと頭がおかしくなりそうだから」と話した。裁判当時、弁護側から自傷行為の言及はあったが、具体的な話を聞くのは初めてだった。暗がりの中で、男性のほおや唇が震えているように見えた。

情報収集活動参加せず

情報提供を求めると断りなことを拒否する理由について「あんな活動で警察と関わることがどうしても嫌だ。人が入れ替わっても警察という組織は変わらない」と訴えた。「マスコミも怖い、しつこくおなたが来ることも怖い。どんな正義を振りかざされても、警察に協力する気はない」「世間で僕のことを知らない人にとち思われても構わない。分かってくれている人たちに分かってもらえほしい」と私の目を見据えた。

私は、利代さんと子どもたちへの思いも聞きたかったが、かなわなかった。男性は20年たった今もなお、自身のトラウマとたからることで精いっぱいのように感じた。

亡くなった4人と一緒に暮らして、当時の生活実態や人間関係を最もよく知るはずの人が、完全に心を閉ざし、警察への協力を永久に拒否した。4人や利代さんの実家の無念を思うと残念でならない。この事件の捜査の特殊性や難しさを改めて痛感する。事件真像でありながら、「容疑者視された人」としてのほういつか気持ちに伝わるのが、男性の自傷について私は直接調査たちに尋ねたが、苛みかを振った。男性の弁護士に改めて取材を申し込んだが、「取材を受ければ彼の苦しみが増す。ご容赦ください」と丁寧に断られた。

男性の言うとおり、その思いは経験した人間でない自分からなにかかもしれない。20年間抱き続けてきた不信感は簡単には消えないだろう。それでも男性にはいつか、事件解決に向けて警察に協力する日が来てほしい。事件の風化とたたかうために、夫と父として、亡くなった4人への思いを共有してくれる時が訪れてほしいと切に願う。

一方で、県警はこれまで、どこまで捜査を尽くしてきたのか。私はさらに取材を続けた。



連載「風化とたたかう」の過去の記事はこちら

令和6年7月14日 中日新聞記事 「交流」

週のはじめに考える



松葉が切り盛りしてしましました。完結と嘉吉の思いを継ぐ4代目店主、内山深さん（52）「写真」は「日本人に中国を知ってもらいたい」との一心で、書店を発展させてきました。

いまでは中国関連の書籍販売に加えて、アジア各国の本、料理本も。中国のネットヘル、コミックは若者に人気で、深さんは「時代に合わせて本を選び、棚に並べています」と話します。来店する客の40%以上は目的

書店の商標は始。天津に3店舗を展開している。そして今、日動きも注目され、中国の作家、松本綾さん（37）代表になり、東京で昨年8月オープン。海外初の出店国、日本、アジアを置き、2階の中国緑茶の龍井。毎週末の交流イベントに100回「近代アジア」た「クアベ」めかりました。

中国の文豪、魯迅の絶筆は仮名交じりの日本語でした。

「十時頃、約英ガキウ出来ナヤカニ昼夕済ミマセ。御願申シマス、電話ノ須藤先生ニ頼リテ下サイ」。上海、内山書店の店主、内山亮造に宛てたメモです。

結核を患った魯迅は1936（昭和11）年10月18日未明、激しい喘息に襲われます。日本人記者と午前11時に書店で会えないことを亮造にわた後、須藤五三医師の

界で書らす日本人をはじめ、魯迅のよに日本留学帰りの中国人、朝鮮人らも出入りして大繁盛。魯迅は27年、当時の国民党政権に追われて広州から上海に逃げ、書店に通うようになりました。

経営が軌道に乗ると、亮造は書店の一角に「アールと藤橋」を置き、来店に宇治の玉露を振る舞い始めます。この空間は日中交流の



作家も立ち寄りました。魯迅は毎日顔を合わせる亮造と親交を深め、サロン仲間に加わります。信頼する亮造が紹介する日本人とは必ず会ったそうです。

日中間では27年に満州事変、32年に上海事変が起き、戦闘状態にありました。そして37年には全面戦争に突入します。

内山書店は45年の終戦後、国民党に接収されました。再開を夢見た亮造は美喜とともに、上海の方